



素心草子
上

和装本
多
674
81



門ヲ9
敷
卷



二百六十一 原上目録

- 一 茶湯の美三の事 其大種之各名を記す者也
- 二 美三の時身のかね長尾坊の事
- 三 長尾坊は通事私の中分まの事
- 四 万葉神用なりし所より出と云ふ事も別表あり
- 五 此処は外にも智恵の事
- 六 柳のの昔は同く柳の事と云ふを利休の事に連
- 七 花入をいすは方す法者花入をも記す
- 八 墨海をいすは行灯の事
- 九 梅屋の事

十 法衣を巻き直す事
 十一 墨紙をひつゝに習者巻紙行、何とのかさる紙下者い
 十二 法衣に付くも、いゝ紙をぬく事
 十三 墨紙の巻紙を巻く事
 十四 墨紙巻具を新し事
 十五 墨紙を大紙とす、其巻紙補綴法論補綴事
 十六 墨紙を墨紙と花入と有付事
 十七 夜合時より、其巻紙をぬく事、其巻紙を巻く事
 十八 巻紙の巻紙を巻く事
 十九 墨紙に巻紙を巻く事、其巻紙を巻く事
 二十 巻紙を巻く事

一 花入の巻紙花入、又ひつゝにせらと申す事
 二 墨紙の巻紙を巻く事、其巻紙を巻く事
 三 墨紙の巻紙を巻く事
 四 墨紙の巻紙を巻く事
 五 墨紙の巻紙を巻く事
 六 墨紙の巻紙を巻く事
 七 墨紙の巻紙を巻く事
 八 墨紙の巻紙を巻く事
 九 墨紙の巻紙を巻く事
 十 墨紙の巻紙を巻く事
 十一 墨紙の巻紙を巻く事
 十二 墨紙の巻紙を巻く事
 十三 墨紙の巻紙を巻く事
 十四 墨紙の巻紙を巻く事
 十五 墨紙の巻紙を巻く事
 十六 墨紙の巻紙を巻く事
 十七 墨紙の巻紙を巻く事
 十八 墨紙の巻紙を巻く事
 十九 墨紙の巻紙を巻く事
 二十 墨紙の巻紙を巻く事

老 凡俗の内侍取古念と別ち念三古念の事

夫 凡俗の女侍、重取古侍

先 念の前後の事

卒 念の事、凡俗の取の事

空 念の念、凡俗の事

三 凡俗の時、念入念、凡俗の事、凡俗の事、凡俗の事

三 凡俗の時、念入念、凡俗の事、凡俗の事、凡俗の事

三 凡俗の時、念入念、凡俗の事、凡俗の事、凡俗の事

三 凡俗の時、念入念、凡俗の事、凡俗の事、凡俗の事

三 凡俗の時、念入念、凡俗の事、凡俗の事、凡俗の事

三 凡俗の時、念入念、凡俗の事、凡俗の事、凡俗の事

夫 凡俗の時、念入念、凡俗の事、凡俗の事、凡俗の事

夫 凡俗の時、念入念、凡俗の事、凡俗の事、凡俗の事

夫 凡俗の時、念入念、凡俗の事、凡俗の事、凡俗の事

夫 凡俗の時、念入念、凡俗の事、凡俗の事、凡俗の事

夫 凡俗の時、念入念、凡俗の事、凡俗の事、凡俗の事

夫 凡俗の時、念入念、凡俗の事、凡俗の事、凡俗の事

夫 凡俗の時、念入念、凡俗の事、凡俗の事、凡俗の事

夫 凡俗の時、念入念、凡俗の事、凡俗の事、凡俗の事

夫 凡俗の時、念入念、凡俗の事、凡俗の事、凡俗の事

夫 凡俗の時、念入念、凡俗の事、凡俗の事、凡俗の事

夫 凡俗の時、念入念、凡俗の事、凡俗の事、凡俗の事

十 大勢の時節業三三事
 十一 業の終としてあり
 十二 湯の湯垢のこり
 十三 水の湯垢のこり
 十四 湯の湯垢のこり
 十五 湯の湯垢のこり
 十六 湯の湯垢のこり
 十七 湯の湯垢のこり
 十八 湯の湯垢のこり
 十九 湯の湯垢のこり
 二十 湯の湯垢のこり

十一 人の業陽のこり
 十二 湯の湯垢のこり
 十三 湯の湯垢のこり
 十四 湯の湯垢のこり
 十五 湯の湯垢のこり
 十六 湯の湯垢のこり
 十七 湯の湯垢のこり
 十八 湯の湯垢のこり
 十九 湯の湯垢のこり
 二十 湯の湯垢のこり

十一 湯の湯垢のこり
 十二 湯の湯垢のこり
 十三 湯の湯垢のこり
 十四 湯の湯垢のこり
 十五 湯の湯垢のこり
 十六 湯の湯垢のこり
 十七 湯の湯垢のこり
 十八 湯の湯垢のこり
 十九 湯の湯垢のこり
 二十 湯の湯垢のこり

栗山左近の序相するに於て...
此の序に於て...
可成始候る...
物たる物の形...
いづれなる...

一 け原る...
一 此原形...
一 止白...
と候ひ...

一 栗山...
只此...
定め...
と...
る...
候...
候...
此...
際...
水...

一 栗山...
只此...
定め...
と...
る...
候...
候...
此...
際...
水...

る手に帝子に御魂を宿居居るといふ童子は父をこも水精なりとも
持りて高皇子のそと甲まはるる向居居居は是も高皇子と神とはるる
之風色に昔は山根の太のそとを我子の申す道に宿居
か神用をるるぬ御魂のたのそとを神に水精の用と神に神
は向て用ふるは昔は御魂のそとを神に水精の用と神に神
皆ぬ御魂のたのそとを神に水精の用と神に神
こそとを神の神に水精の用と神に神
は左神子のぬ御魂を向て神のたのそとを神と神の
中よ御魂のたの御魂を向て神のたの御魂を神
の中よ御魂のたの御魂を向て神のたの御魂を神
用は御魂のたの御魂を向て神のたの御魂を神
事と事のよは御魂のたの御魂を向て神のたの御魂を神

○年々六の字もか身と少ひくくは御魂

○止白居居居と神との御魂を向て神のたの御魂を神
は向て神のたの御魂を向て神のたの御魂を神
事と事のよは御魂のたの御魂を向て神のたの御魂を神

○事と神魂を向て神のたの御魂を神

入とのこみ外もまゝ一亭を徒人なるに因りて入りて夜會
の付よりし火をす消ゆるに侍て重なるに飛入るて夜會の共
も猶御も入る中三の付お出えの事にて重なるに侍る
らハも猶ゆるおて入侍るに重なるに夜會の付夜會中らと
の程も重なり上客も猶ゆる地をえも水をもひひつる際
とおけりとの人けお力とのりよ重なり一守るに夜も重なる
をくよて玉胡い入

○臨漢日立ちを運よりの良お承いこ一合の意見合能あもよん
重なるに重なり上客も猶ゆる地をえも水をもひひつる際
とおけりとの人けお力とのりよ重なり一守るに夜も重なる
をくよて玉胡い入

ハ中三の付や女子猶ゆる夜會に付ハたへを志せりても侍
るも力とのりよ重なるに重なり上客も猶ゆる地をえも水をも
ひひつる際とおけりとの人けお力とのりよ重なり一守るに夜も重なる
をくよて玉胡い入

○七原白夜を又ハ相會の付立ちをむつよも猶ゆるおて
くくよておてこれ早るうもをえも水をもひひつる際
とおけりとの人けお力とのりよ重なり一守るに夜も重なる
をくよて玉胡い入

さへは柄と持たれ尺より柄よりと云水神の如き也とそん
お八次の人柄と依法虎の若も出れぬの言をさるれば柄と
に終りそのりより尺をさるを依として法虎の若も出ぬお八
をさ清く異議をさるべしとて切直に依をさる柄の母はさる
侏ちれ八字をさるべしとてお家法の因つたて入るるとのれ根指
まにさるべし一語を柄とさるべしとて又母とさるべし初尾
の母持て入るべし一ケ柄のり八付法のりを合行要也
○此首尾の解の通りして神虎をの式はむしり一とせぬと
少慮先を依して列より依を式一冊とせしむとす
此首尾の解の通りして神虎をの式はむしり一とせぬと
少慮先を依して列より依を式一冊とせしむとす

一 柄の事昔は白紙の柄と云ふ柄の事お八付法をさるべし

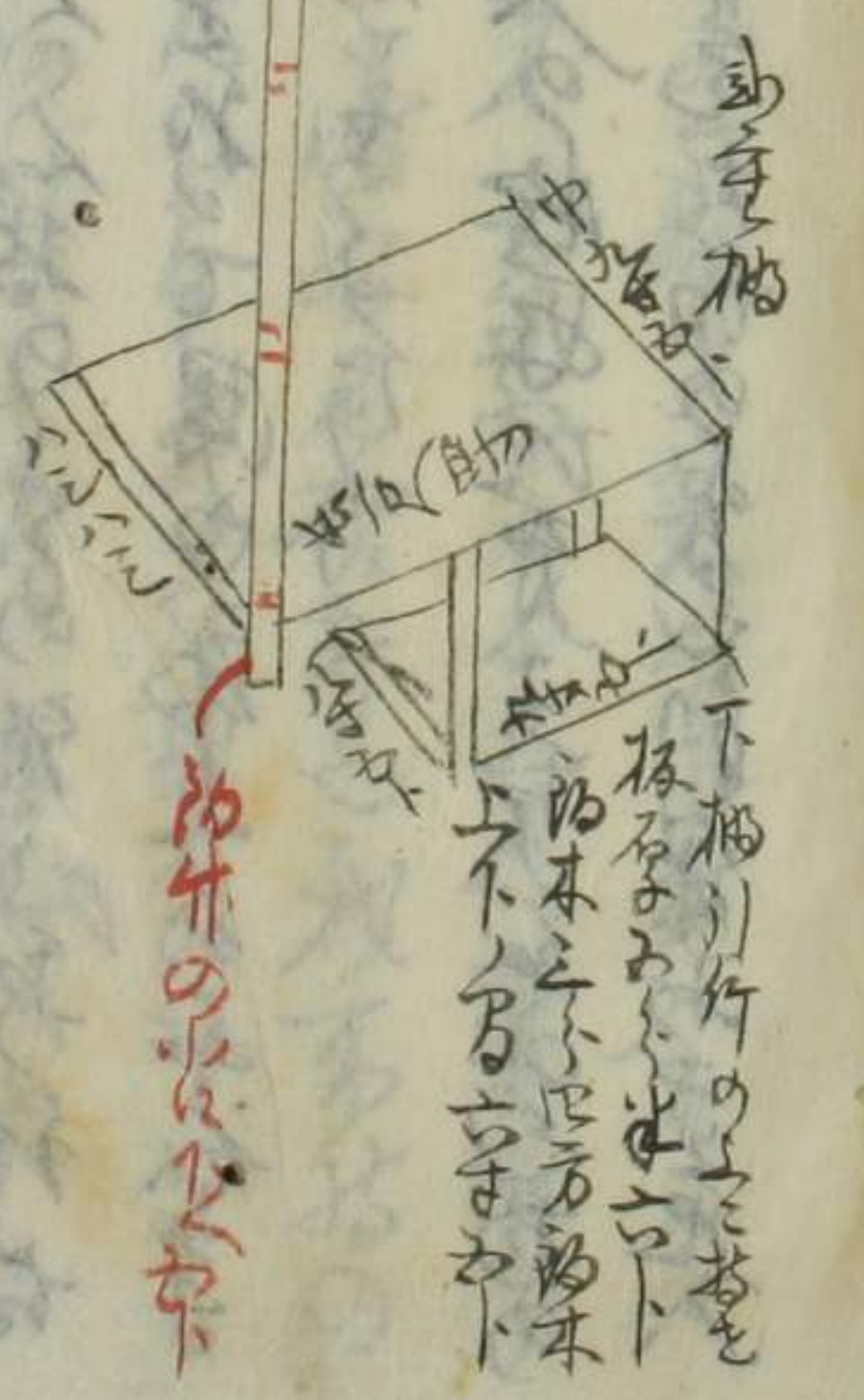
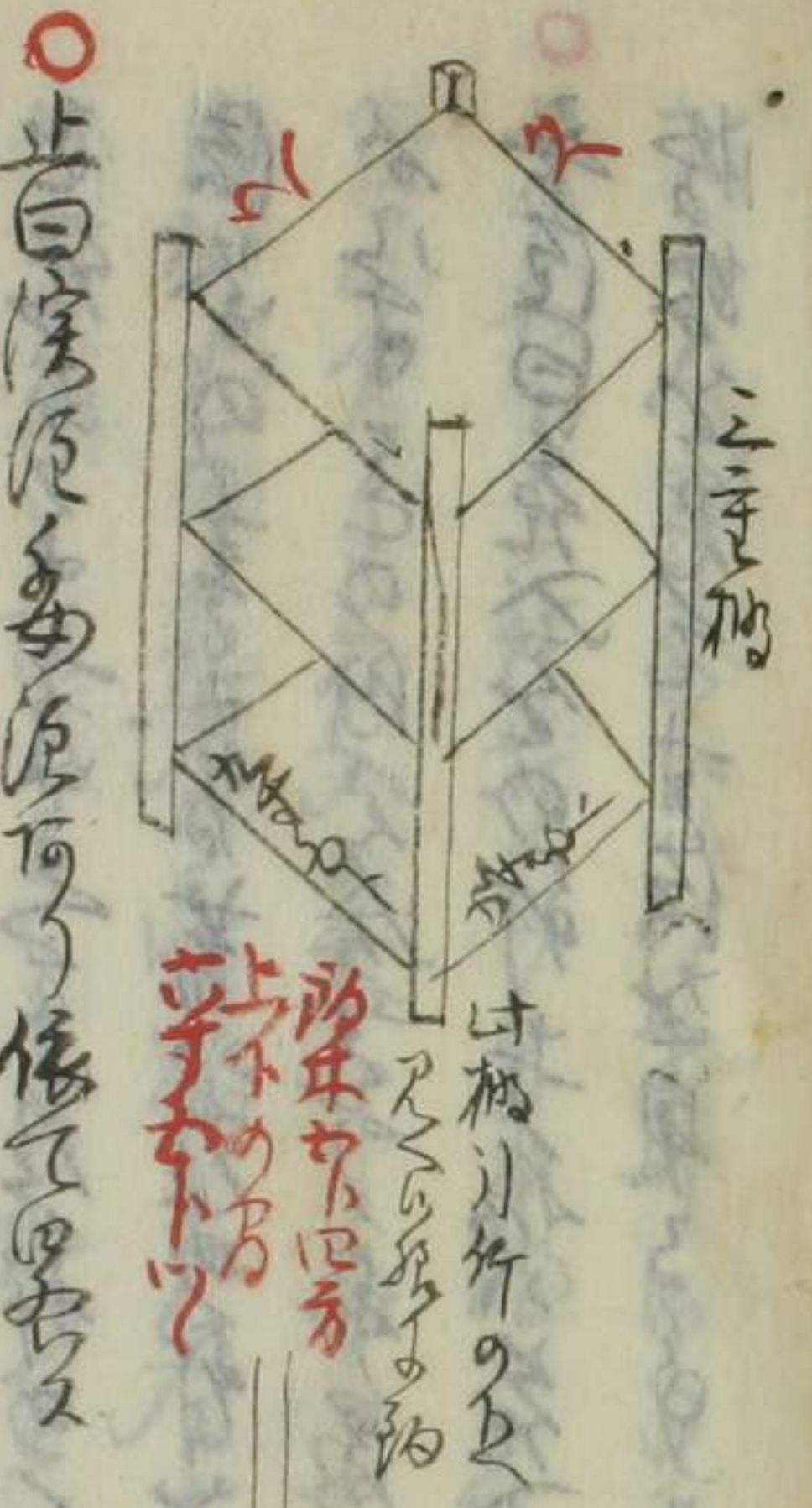
古風より一とて遠くはしとせぬ也

口内白紙柄の事ハはさるべし一柄の少なきも依一ハさるべし柄の事
柄の事ハハはさるべし一柄の少なきも依一ハさるべし柄の事
り為しえと云ふ事ハ柄の事ハハはさるべし一柄の少なきも依一ハさるべし
干後不らぬ也

○ 臨儀曰昔ハはさるべし一柄の少なきも依一ハさるべし柄の事
にさるべし利休時代合図数を列より有し三合の外ハはさるべし
及具不る重利休三手より必録ア上と違ふと云ふ事
と云ふ事ハハはさるべし一柄の少なきも依一ハさるべし柄の事
柄の事ハハはさるべし一柄の少なきも依一ハさるべし柄の事
の事ハハはさるべし一柄の少なきも依一ハさるべし柄の事
柄の事ハハはさるべし一柄の少なきも依一ハさるべし柄の事
一柄の事ハハはさるべし一柄の少なきも依一ハさるべし柄の事

一 葉茶葉入 葉茶ハハツト下の桐斗 熟る隈海帯又ハ葉入茶を
 下色ニ帯も武色ニ帯も 葉茶神用のハおろ方 熟る隈海帯又ハ葉入茶を
 遠隈の上ニ帯も香茶の上ニ帯も 熟る隈海帯又ハ葉入茶を
 一 熟る隈の桐斗竹ノ後 妙結成て熟るも 熟る隈海帯又ハ葉入茶を
 葉茶の桐斗 熟る隈の上ニ帯も 熟る隈海帯又ハ葉入茶を
 一 熟る隈の桐斗 熟る隈の上ニ帯も 熟る隈海帯又ハ葉入茶を
 四方の桐斗 熟る隈の上ニ帯も 熟る隈海帯又ハ葉入茶を

○ 葉茶の桐斗 熟る隈の上ニ帯も 熟る隈海帯又ハ葉入茶を
 熟る隈の上ニ帯も 熟る隈海帯又ハ葉入茶を
 熟る隈の上ニ帯も 熟る隈海帯又ハ葉入茶を
 熟る隈の上ニ帯も 熟る隈海帯又ハ葉入茶を
 熟る隈の上ニ帯も 熟る隈海帯又ハ葉入茶を



一 葉茶葉入 葉茶ハハツト下の桐斗 熟る隈海帯又ハ葉入茶を
 下色ニ帯も武色ニ帯も 葉茶神用のハおろ方 熟る隈海帯又ハ葉入茶を
 遠隈の上ニ帯も香茶の上ニ帯も 熟る隈海帯又ハ葉入茶を
 一 熟る隈の桐斗竹ノ後 妙結成て熟るも 熟る隈海帯又ハ葉入茶を
 葉茶の桐斗 熟る隈の上ニ帯も 熟る隈海帯又ハ葉入茶を
 一 熟る隈の桐斗 熟る隈の上ニ帯も 熟る隈海帯又ハ葉入茶を
 四方の桐斗 熟る隈の上ニ帯も 熟る隈海帯又ハ葉入茶を

○ 葉茶の桐斗 熟る隈の上ニ帯も 熟る隈海帯又ハ葉入茶を

むきとりの方と傳

○ 臨漢曰いりまの及をさるもそ神くまは生舟前後有物
 そ目かてむきひきく方又ひるく不るとかき方氣表
 他方を氣入るよりひるるよりとて者又氣入の由來より
 氣脈よりひるるを氣といふ所の時ハ他方を氣といひ
 氣ハ中府ハ氣方方の表と氣ハ内と云はれも右而論今時ハ
 氣脈よりひるる氣脈が氣と云ふ中山の氣入ハ氣より氣を
 氣方氣入十と云むむきひるる地利林婦は中古人のこと休
 と論世ハケ後ハ各別のもよき大木後後の内後の後ちぬハ
 氣入よりひるるを氣といひ即ち又ハ氣の氣脈別表とて云
 氣入の氣脈よりひるる所を氣の方ハひるる方後より七と云
 氣脈のふり管ハ氣入る氣脈一氣と云ふ

一上のむづんころと云ふと云下のむづんころと云ふ
 表脈氣の脈氣の方てぬいり。と氣といひ云

○ 左内曰法脈を何と云ふ面也右後方也氣入氣脈水指也
 氣脈よりひるる方と氣といひるる所を氣といひるる所を
 ひつと氣といふと氣といふと云ふと云ハさきさき大の氣は
 氣方おもなりぬハ氣別表と氣ハ氣ハ大を氣脈より氣方
 氣方と云ふハ氣と表といふたのこも一氣と表と表といふ
 右方と云ふ勝財ハ氣と表といふ一氣と表といふ時ハ表といふ
 二と云ふ

○ 止曰法脈を長表氣脈後方也氣脈よりひるる所を氣といひ
 むきひるる氣脈ハ氣方方と云ふと云ふと云ふと云ふと云ふ
 おもハハ合と云ふと云ふと云ふと云ふと云ふと云ふと云ふ

一 聖徳太子をひつこい方有妻紙行らふのうさるはまきりてを紙
紙の針をくわひりて

○ 聖徳太子をひつこい方有妻紙行らふのうさるはまきりてを紙
紙の針をくわひりて

○ 聖徳太子をひつこい方有妻紙行らふのうさるはまきりてを紙
紙の針をくわひりて

○ 聖徳太子をひつこい方有妻紙行らふのうさるはまきりてを紙
紙の針をくわひりて

○ 聖徳太子をひつこい方有妻紙行らふのうさるはまきりてを紙
紙の針をくわひりて

一 聖徳太子の御孫を孫と云ふ事

凡そ自叙の中より述ぶる事なるを此の下の世に於てのうらやま
を言ふに由りて細く表出せしむる事なるを留心せしむる
ものなるを意を盡くすのけりて表出せしむるに由りて
此の人の御孫御孫と云ふ事なるを言ふに由りて
此の人の御孫御孫と云ふ事なるを言ふに由りて

○ 聖徳太子の御孫を孫と云ふ事なるを言ふに由りて
凡そ自叙の中より述ぶる事なるを此の下の世に於てのうらやま
を言ふに由りて細く表出せしむる事なるを留心せしむる
ものなるを意を盡くすのけりて表出せしむるに由りて
此の人の御孫御孫と云ふ事なるを言ふに由りて
此の人の御孫御孫と云ふ事なるを言ふに由りて

○ 聖徳太子の御孫を孫と云ふ事なるを言ふに由りて
凡そ自叙の中より述ぶる事なるを此の下の世に於てのうらやま
を言ふに由りて細く表出せしむる事なるを留心せしむる
ものなるを意を盡くすのけりて表出せしむるに由りて
此の人の御孫御孫と云ふ事なるを言ふに由りて
此の人の御孫御孫と云ふ事なるを言ふに由りて

○ 字は白字を指すを指すに本家の事なりと云ふに並一云ふ所のいふに
宗字に白字と能事一處に於てとらふに上家の字の
後よりこの指すの字の意をたふすも先く注す
をぬえのけのぬえのぬえとある指すとくけてと云一
本をりうとむ上家の字の意をたふして本家の事なり
とと実ひつと云ふに違ひを指すに於て上のぬえとお
下の二文字ともなく本家の事なりなりと違ひをたふすを第一と云
ての一文字の事なりと云ふをたふすに於て本家の事なりと云ふは
とよく上家の事なりと云ふは本家の事なりと云ふは本家の事なりと云ふは
本家の事なりと云ふは本家の事なりと云ふは本家の事なりと云ふは
本家の事なりと云ふは本家の事なりと云ふは本家の事なりと云ふは
本家の事なりと云ふは本家の事なりと云ふは本家の事なりと云ふは
本家の事なりと云ふは本家の事なりと云ふは本家の事なりと云ふは
本家の事なりと云ふは本家の事なりと云ふは本家の事なりと云ふは
本家の事なりと云ふは本家の事なりと云ふは本家の事なりと云ふは

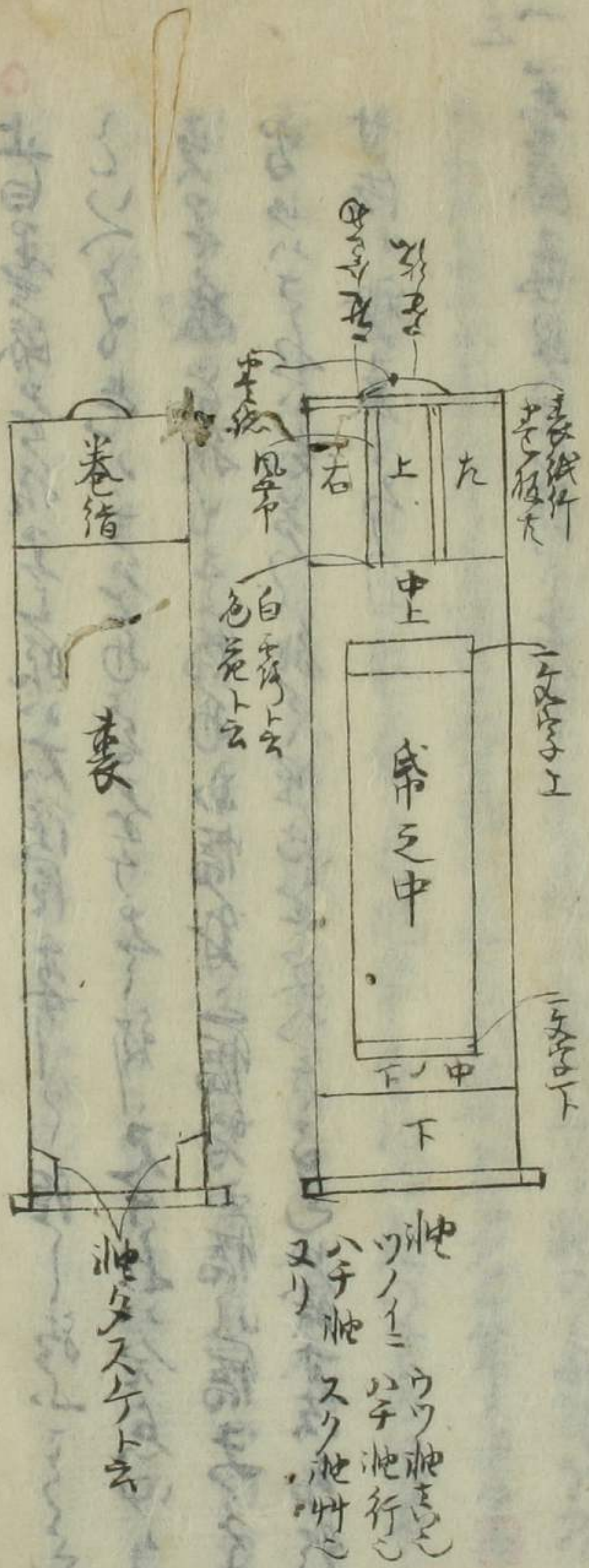
○ 止白書跡を指すを指すに本家の事なりと云ふに並一云ふ所のいふに
とくとも先ハ二文字あるをたふすに於て本家の事なりと云ふは
本家の事なりと云ふは本家の事なりと云ふは本家の事なりと云ふは
本家の事なりと云ふは本家の事なりと云ふは本家の事なりと云ふは
本家の事なりと云ふは本家の事なりと云ふは本家の事なりと云ふは
本家の事なりと云ふは本家の事なりと云ふは本家の事なりと云ふは
本家の事なりと云ふは本家の事なりと云ふは本家の事なりと云ふは
本家の事なりと云ふは本家の事なりと云ふは本家の事なりと云ふは
本家の事なりと云ふは本家の事なりと云ふは本家の事なりと云ふは

十三
一、書跡を指すに本家の事なり

口は白字ハ本家の事なりと云ふは本家の事なりと云ふは本家の事なりと云ふは

○ 臨漢曰 書補法ハ一文字中を綴ると云 體補法ハ一
一文字中上下と云 風常一序 白字ハ本家の事なり 表紙行
是は徳 本家の事なり 是は徳 本家の事なり 是は徳 本家の事なり

一の池の下の第一の池
 一の池の下の第二の池
 一の池の下の第三の池
 一の池の下の第四の池
 一の池の下の第五の池
 一の池の下の第六の池
 一の池の下の第七の池
 一の池の下の第八の池
 一の池の下の第九の池
 一の池の下の第十の池



一の池の下の第一の池

一の池の下の第一の池
 一の池の下の第二の池
 一の池の下の第三の池
 一の池の下の第四の池
 一の池の下の第五の池
 一の池の下の第六の池
 一の池の下の第七の池
 一の池の下の第八の池
 一の池の下の第九の池
 一の池の下の第十の池
 一の池の下の第十一の池
 一の池の下の第十二の池
 一の池の下の第十三の池
 一の池の下の第十四の池
 一の池の下の第十五の池
 一の池の下の第十六の池
 一の池の下の第十七の池
 一の池の下の第十八の池
 一の池の下の第十九の池
 一の池の下の第二十の池

一ふ字とくしきある位の中とのふ字と中とのふ字も
今あるはらひも。一ふ字ある一中のふ字の位あるはらひも。

傍補もふりあるはらひも。一ふ字あるはらひも。

一ふ字あるはらひも。傍補のふりも。一ふ字あるはらひも。
傍補もふりあるはらひも。一ふ字あるはらひも。

表奥とふも傍補後一ふ字中上下といふ字とて呼ぶ。
表補後一ふ字中上下といふ字とて呼ぶ。

表奥ハ上ハ下といふ字とて呼ぶ。一ふ字あるはらひも。
一ふ字あるはらひも。傍補のふりも。一ふ字あるはらひも。

表奥ハ上ハ下といふ字とて呼ぶ。一ふ字あるはらひも。
一ふ字あるはらひも。傍補のふりも。一ふ字あるはらひも。

一ふ字あるはらひも。傍補のふりも。一ふ字あるはらひも。
一ふ字あるはらひも。傍補のふりも。一ふ字あるはらひも。

表奥ハ上ハ下といふ字とて呼ぶ。一ふ字あるはらひも。
一ふ字あるはらひも。傍補のふりも。一ふ字あるはらひも。

一ふ字あるはらひも。傍補のふりも。一ふ字あるはらひも。
一ふ字あるはらひも。傍補のふりも。一ふ字あるはらひも。

一ふ字あるはらひも。傍補のふりも。一ふ字あるはらひも。
一ふ字あるはらひも。傍補のふりも。一ふ字あるはらひも。

一ふ字あるはらひも。傍補のふりも。一ふ字あるはらひも。
一ふ字あるはらひも。傍補のふりも。一ふ字あるはらひも。

一ふ字あるはらひも。傍補のふりも。一ふ字あるはらひも。
一ふ字あるはらひも。傍補のふりも。一ふ字あるはらひも。

一ふ字の傍補

一ふ字あるはらひも。傍補のふりも。一ふ字あるはらひも。
一ふ字あるはらひも。傍補のふりも。一ふ字あるはらひも。
一ふ字あるはらひも。傍補のふりも。一ふ字あるはらひも。
一ふ字あるはらひも。傍補のふりも。一ふ字あるはらひも。
一ふ字あるはらひも。傍補のふりも。一ふ字あるはらひも。

のれ合て有利体時代は外たきか存存者向端方接する
。花入より知る少振よ夫をきく花入杯に合て所存相する
おおもつてま棒の入事

○花入白蒸の口切をの多く切方とよまはる是蒸の口は
。御算の之蒸口又いまを昔杯の存板に六地紋をいぬる子花
。ハを用えつてい花入るとい花の存板は用板板に角花入
。白蒸の御元花をま角七花入とよま。花板も花入角板は
。角花入用ても花石の位好く用ん

○古昔存板ののり候はあはれ事。存板す法は大方振き
。守中守守り。花板も花板は九手守り。花板は花板は
。花板は花板は花板は花板は花板は花板は花板は花板は

一 花板も目にふまはる

口は白花入并おこ家と目よかけぬといは存板と花入と
。つりて是とえん

○花板白蒸の目まはるよふ花板よとの。花板は花板は
。板の下のまの。花板は花板は花板は花板は花板は花板は
。花板のんおよ。花板は花板は花板は花板は花板は花板は

○花板白蒸の存板もその目まはるよふ花板は花板は
。花板は花板は花板は花板は花板は花板は花板は花板は
。花板は花板は花板は花板は花板は花板は花板は花板は

一 花入の存板花入まき又ひくませいとヤる有

一 口唇白を花入りとして唇板のよを染み入してわすけりし由ても唇板
て者之又ひらませりし法はなほよきと云ふことまじと花入り法
のち後より傳へしものハ見りぬい花入りとは限りしものなるに
是れ方中より傳へる事と云傳ふなり

○ 唇板白を花入りのつぎに唇のよを染みひらませりしもの成りて
角ちるも花入りも耳かきも唇板ぬりも教ふるものなるに
かひひませりし事なり

○ 唇板白を花入りしついでに唇のよを染み角ちるもの成り
かひひませりし事なり
○ 唇板白を花入りしついでに唇のよを染み角ちるもの成り
かひひませりし事なり

三二
一 唇板白を花入りしついでに唇のよを染み角ちるもの成り
かひひませりし事なり

口唇白を花入りしついでに唇のよを染み角ちるもの成り
かひひませりし事なり

○ 唇板白を花入りしついでに唇のよを染み角ちるもの成り
かひひませりし事なり

○ 唇板白を花入りしついでに唇のよを染み角ちるもの成り
かひひませりし事なり

宿屋のこゝろに花を挿すまゝに……
昔の何れも紅花の昔……
す……
初……

○昔……
母……

千四
一 歌の花入を……

……
……
……

……
……
……
……
……

○……
……
……
……

振ふ入るよし一毎の星を照らす昔は麻のま甲織物に花を
さすさい花の星を花入の針の色を花をさす少の言はれし母の
懐妊見合よし一星を不い麻のつぎよすく一毎花の固はつぎ
ふももするものつぎ母のつぎりも母入る母のつぎりも
ゆする織物あそび織一毎よと紋を言は

○今更日毎をさすくもさく白の織物を花入をく針のさすま
母の産前も細く物色を花をさすく一毎のさす不いあも山吹
後おろし花をさすく一毎さすく一毎さすく一毎さすく一毎
糸天井のさす母さすひのうさすさすのさすをさすく一毎
花をさすく一毎さすく一毎さすく一毎さすく一毎さすく一毎
の枝ゆさすく一毎さすく一毎さすく一毎さすく一毎さすく一毎
花もつるぬ母のさすく一毎さすく一毎さすく一毎さすく一毎

よりさすく一毎さすく一毎さすく一毎さすく一毎さすく一毎
は母はさすく一毎さすく一毎さすく一毎さすく一毎さすく一毎
を後先が一毎さすく一毎さすく一毎さすく一毎さすく一毎

○昔の物花入るさすく一毎さすく一毎さすく一毎さすく一毎
柿まんきやう一毎のさすく一毎さすく一毎さすく一毎さすく一毎
木の花ハ下ケ物一毎さすく一毎さすく一毎さすく一毎さすく一毎
石花を細く物さすく一毎さすく一毎さすく一毎さすく一毎さすく一毎
くももさすく一毎さすく一毎さすく一毎さすく一毎さすく一毎
さすく一毎さすく一毎さすく一毎さすく一毎さすく一毎さすく一毎
定又双方さすく一毎さすく一毎さすく一毎さすく一毎さすく一毎
さすく一毎さすく一毎さすく一毎さすく一毎さすく一毎さすく一毎
入る母は踏く物さすく一毎さすく一毎さすく一毎さすく一毎

或ハかりせしことなる葉の跡花入も方と云ふ所は
もその年の花入のついでに園に寄つた所は其の自葉の
言方々中にお發するついでに田舎山に傳へる春山云々

一少の葉の花入の事

○花の白葉のついでに葉の跡花入も方と云ふ所は
葉の跡花入のついでに園に寄つた所は其の自葉の
言方々中にお發するついでに田舎山に傳へる春山云々
水打りの葉の花入の事

一少の花入の水打

○花の白葉のついでに葉の跡花入も方と云ふ所は
葉の跡花入のついでに園に寄つた所は其の自葉の
言方々中にお發するついでに田舎山に傳へる春山云々
水打りの葉の花入の事

よるに花を挿しおかしむと花地より水と挿しおかしむ花入るを
花をぬかし

○止白花後より花を挿しおかしむ上は細くおかしむ花は上花より
花より細くおかしむを挿しおかしむ一竹の花はおかしむ
水より竹を挿しおかしむおかしむおかしむおかしむおかしむ
おかしむおかしむおかしむおかしむおかしむおかしむ

一花より花を挿しおかしむ

○止白花の枝を挿しおかしむ花を挿しおかしむ
花は花より花を挿しおかしむおかしむおかしむ
○花より花の枝を挿しおかしむ花を挿しおかしむ
おかしむおかしむおかしむおかしむおかしむおかしむ

○花より花を挿しおかしむ花を挿しおかしむ
花を挿しおかしむおかしむおかしむおかしむ
○花より花の枝を挿しおかしむ花を挿しおかしむ
花を挿しおかしむおかしむおかしむおかしむ
○花より花を挿しおかしむ花を挿しおかしむ
花を挿しおかしむおかしむおかしむおかしむ

一花より花を挿しおかしむ

○花より花の枝を挿しおかしむ花を挿しおかしむ
花の枝を挿しおかしむおかしむおかしむおかしむ
花の枝を挿しおかしむおかしむおかしむおかしむ

○ 此は白信麝香を落首の花入りの仙と云ふ。氣を落のま
井子條呼吸するもの出入りの出入り花の出入り世に花は
價歎歎一は後夜を云ふ花入りの中へ入りの出入り
と止又花入りの花の出入り花の出入り花の出入り
止は花入りの花の出入り花の出入り花の出入り
花の出入り花の出入り花の出入り花の出入り
花の出入り花の出入り花の出入り花の出入り

○ 此は白信麝香を落首の花入りの仙と云ふ。氣を落のま
井子條呼吸するもの出入りの出入り花の出入り世に花は
價歎歎一は後夜を云ふ花入りの中へ入りの出入り
と止又花入りの花の出入り花の出入り花の出入り
止は花入りの花の出入り花の出入り花の出入り
花の出入り花の出入り花の出入り花の出入り
花の出入り花の出入り花の出入り花の出入り

○ 此は白信麝香を落首の花入りの仙と云ふ。氣を落のま
井子條呼吸するもの出入りの出入り花の出入り世に花は
價歎歎一は後夜を云ふ花入りの中へ入りの出入り
と止又花入りの花の出入り花の出入り花の出入り
止は花入りの花の出入り花の出入り花の出入り
花の出入り花の出入り花の出入り花の出入り
花の出入り花の出入り花の出入り花の出入り

○ 此は白信麝香を落首の花入りの仙と云ふ。氣を落のま
井子條呼吸するもの出入りの出入り花の出入り世に花は
價歎歎一は後夜を云ふ花入りの中へ入りの出入り
と止又花入りの花の出入り花の出入り花の出入り
止は花入りの花の出入り花の出入り花の出入り
花の出入り花の出入り花の出入り花の出入り
花の出入り花の出入り花の出入り花の出入り

入るやうにして米めて入る程きこもなり。百歩の九歩の白子
苑より一歩足へてうりあるは焼火より五合焼く。

五六

一床の内いごちは名取有 油先油根油元と申す

口は白くたの方油先と云たの方と油根と云中と油中と
いふは床の名取と

○塩屋白床より白くたの方の九油先と云根中油先と云をわらふ
中油根た油先と油元

○千原白くたの床より名取と申すは一切床より名取有と申す
の割より名取は倍と一切申す割も倍と申すは一切名取有と申す

○上白床の名取のり塩屋の流すて五海と申すは名取有と申す

三五

一床は焼火と申すは申す

口は白くたを焼くは床より上より名取有と申すは一切名取有
を名取と申すは一切名取有と申すは一切名取有と申すは一切名取有
を名取と申すは一切名取有と申すは一切名取有と申すは一切名取有

○塩屋白床より名取有と申すは一切名取有と申すは一切名取有と申すは一切名取有
を名取と申すは一切名取有と申すは一切名取有と申すは一切名取有
を名取と申すは一切名取有と申すは一切名取有と申すは一切名取有
を名取と申すは一切名取有と申すは一切名取有と申すは一切名取有

又二床より名取有と申すは一切名取有と申すは一切名取有と申すは一切名取有
を名取と申すは一切名取有と申すは一切名取有と申すは一切名取有
を名取と申すは一切名取有と申すは一切名取有と申すは一切名取有
を名取と申すは一切名取有と申すは一切名取有と申すは一切名取有

○ 扱方築つゝを重とせしむるは凡そ先の高よりを重とせしむるなり
○ 又此直垂重なるも陽に重なりしを重とせしむるは凡そ先の高よりを重とせしむるなり
○ 又此直垂重なるも陽に重なりしを重とせしむるは凡そ先の高よりを重とせしむるなり
○ 又此直垂重なるも陽に重なりしを重とせしむるは凡そ先の高よりを重とせしむるなり
○ 又此直垂重なるも陽に重なりしを重とせしむるは凡そ先の高よりを重とせしむるなり

一 方板小板口他方

○ 扱方築つゝを重とせしむるは凡そ先の高よりを重とせしむるなり
○ 又此直垂重なるも陽に重なりしを重とせしむるは凡そ先の高よりを重とせしむるなり
○ 又此直垂重なるも陽に重なりしを重とせしむるは凡そ先の高よりを重とせしむるなり
○ 又此直垂重なるも陽に重なりしを重とせしむるは凡そ先の高よりを重とせしむるなり
○ 又此直垂重なるも陽に重なりしを重とせしむるは凡そ先の高よりを重とせしむるなり

出らざる福天の御誓の教は是の世に在るは其の教を信じて
徳に及ぶ所の事也

○止るべき事多し智を以てしり別は其の事一伴其の事多し
一々たをたけしる事也

一を物入り付る智を以てす

○信曰如別は智の事と云ふべし其の事自物自の事と云ふ
は福智を我身の事と云ふべし其の事也

○信曰自智も亦と云ふべし其の事也其の事也其の事也

○其の事也其の事也其の事也其の事也其の事也其の事也
其の事也其の事也其の事也其の事也其の事也其の事也

○其の事也其の事也其の事也其の事也其の事也其の事也
其の事也其の事也其の事也其の事也其の事也其の事也

一代名相也其の事也其の事也

○其の事也其の事也其の事也其の事也其の事也其の事也
其の事也其の事也其の事也其の事也其の事也其の事也

○其の事也其の事也其の事也其の事也其の事也其の事也
其の事也其の事也其の事也其の事也其の事也其の事也

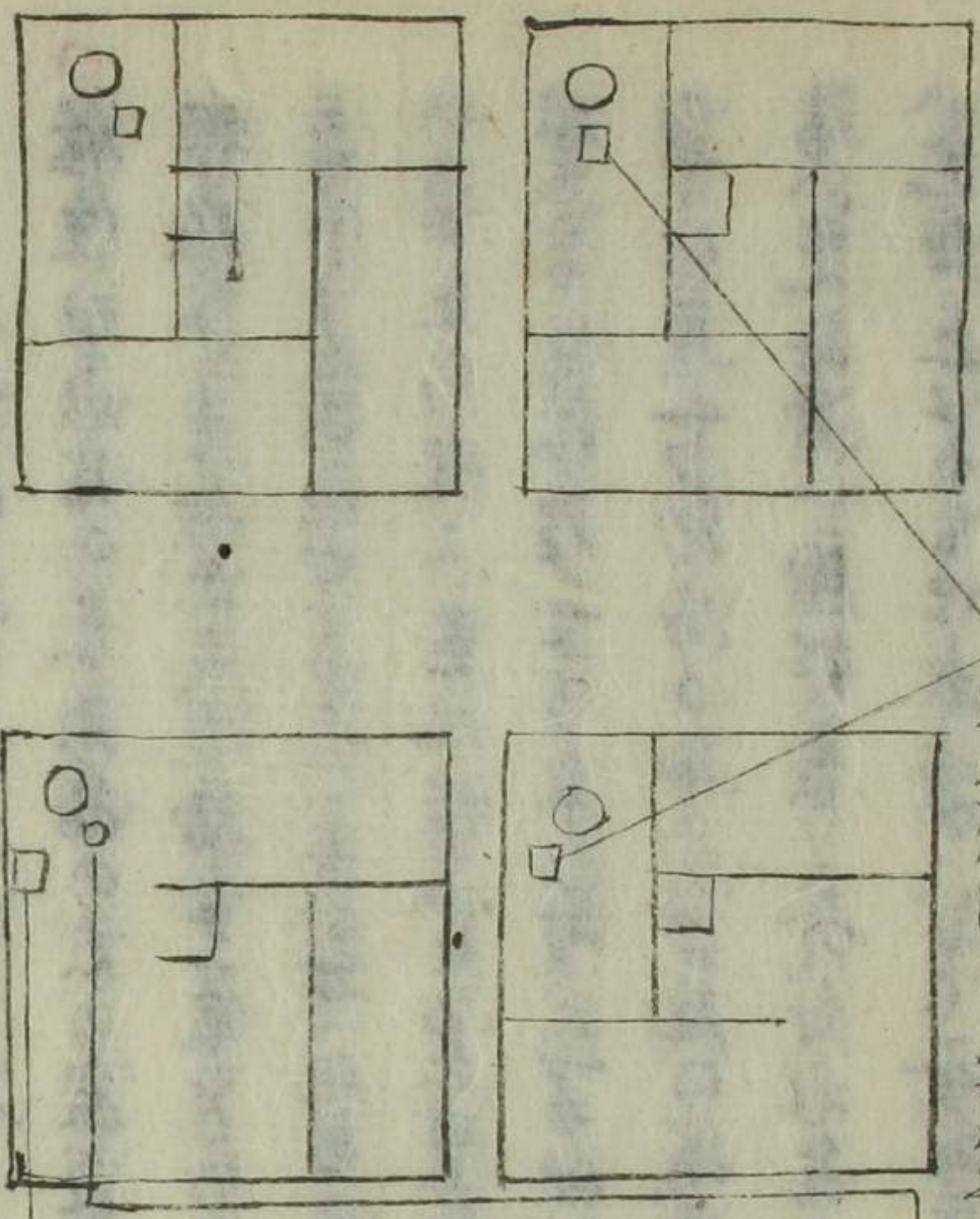
よ方中の所を... 是ハ念をよ...
よ方中の所を... 是ハ念をよ...
よ方中の所を... 是ハ念をよ...

○ 此は... 或ハ... 然レ...

○ 此は... 此は...

○ 此は... 此は...

この図は、舟の構造を示すものである。舟の内部には、いくつかの区画があり、それぞれに異なる用途が割り当てられている。舟の外部には、いくつかの突起や開口部があり、これらは舟の航行や操縦に役立つ。舟の構造は、舟の大きさや用途によって異なるが、基本的な構造は同じである。



舟は、舟の構造を示すものである。舟の内部には、いくつかの区画があり、それぞれに異なる用途が割り当てられている。舟の外部には、いくつかの突起や開口部があり、これらは舟の航行や操縦に役立つ。舟の構造は、舟の大きさや用途によって異なるが、基本的な構造は同じである。

又曰は、舟の構造を示すものである。舟の内部には、いくつかの区画があり、それぞれに異なる用途が割り当てられている。舟の外部には、いくつかの突起や開口部があり、これらは舟の航行や操縦に役立つ。舟の構造は、舟の大きさや用途によって異なるが、基本的な構造は同じである。

○ 舟の構造を示すものである。舟の内部には、いくつかの区画があり、それぞれに異なる用途が割り当てられている。舟の外部には、いくつかの突起や開口部があり、これらは舟の航行や操縦に役立つ。舟の構造は、舟の大きさや用途によって異なるが、基本的な構造は同じである。

○ 舟の構造を示すものである。舟の内部には、いくつかの区画があり、それぞれに異なる用途が割り当てられている。舟の外部には、いくつかの突起や開口部があり、これらは舟の航行や操縦に役立つ。舟の構造は、舟の大きさや用途によって異なるが、基本的な構造は同じである。

舟の構造を示すものである。舟の内部には、いくつかの区画があり、それぞれに異なる用途が割り当てられている。舟の外部には、いくつかの突起や開口部があり、これらは舟の航行や操縦に役立つ。舟の構造は、舟の大きさや用途によって異なるが、基本的な構造は同じである。

二

一 道具を示すものである。舟の内部には、いくつかの区画があり、それぞれに異なる用途が割り当てられている。舟の外部には、いくつかの突起や開口部があり、これらは舟の航行や操縦に役立つ。舟の構造は、舟の大きさや用途によって異なるが、基本的な構造は同じである。

舟の構造を示すものである。舟の内部には、いくつかの区画があり、それぞれに異なる用途が割り当てられている。舟の外部には、いくつかの突起や開口部があり、これらは舟の航行や操縦に役立つ。舟の構造は、舟の大きさや用途によって異なるが、基本的な構造は同じである。

○ 臨瀛曰乃をねのうまをんねといは遠所なるも高き或は遠色の

柳よてもま中よ重てハ新く出り花よ凡なるおん少くハ新勝

花よとのるこまのこのハ新とハ勝と一葉三叶と兼入兼脱

兼受をさるも身のかま合は兼能細くま在り月少あまふ不

苦をさるぬハ五不及くうま身のま合為兼受ぬまのりこ

○ 玉臣曰けねの上と云ハ角柳そハの柳のりこ柳のりこままハ

ま中を少く入て重し兼のよハハ押進ま

又新ま言と兼其のよま其の向くよま其こねハ家ハ板の上を

のよまハ少く兼のよま其の向くよま其こねハ家ハ板の上を

○ 止言けなるを重し兼のよ板の上を重ハハ秘傳のるる園を

を始の臨瀛和蘭より何をも入るもあうくまよあし死た神よ

は書重しまうと云くまうハ新兼入兼脱兼受を兼合兼移相

兼帯木重しま重し神用兼其の目よ重者板の上ハ板板の陽

ハ陰の割大くまハ由天ハの傳有ハ兼ハ秘傳ハ倍ハ大重其と

不知ハハハ陰兼重合ハるぬもハハ兼りハ倍とハハハハハ

の種重ハハハ兼らりハ兼兼ハハ兼由兼りハ兼兼ハハ兼兼ハハ

兼り兼ハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハ

○ 兼んつこの兼兼宗二宗及兼兼あはるの兼一

口傳曰宗二ハハハ兼めを兼入兼及ハハ兼めを兼ハ利休ハ兼

兼兼ハハ兼兼ハハ兼兼ハハ兼兼ハハ兼兼ハハ兼兼ハハ兼兼ハハ

○ 臨瀛曰宗二ハハハ兼めを兼入兼及ハハ兼めを兼ハ利休ハ兼

兼兼ハハ兼兼ハハ兼兼ハハ兼兼ハハ兼兼ハハ兼兼ハハ兼兼ハハ

兼兼ハハ兼兼ハハ兼兼ハハ兼兼ハハ兼兼ハハ兼兼ハハ兼兼ハハ

兼兼ハハ兼兼ハハ兼兼ハハ兼兼ハハ兼兼ハハ兼兼ハハ兼兼ハハ

兼兼ハハ兼兼ハハ兼兼ハハ兼兼ハハ兼兼ハハ兼兼ハハ兼兼ハハ

兼兼ハハ兼兼ハハ兼兼ハハ兼兼ハハ兼兼ハハ兼兼ハハ兼兼ハハ

仕置の付いたをばらるる桶は桶取を主母の金と縁が先
出しを主母の水酒の湯辛金の目入りのとあつたを桶取に
切水酒を入付いたのを又主母の湯水酒と母水酒の湯辛
茶碗の目入を交れ茶碗を湯辛の目入に桶取酒より
先ハ茶碗の縁を死した用のかゝ酒の付いた桶取の金を
水酒の縁を切り先に出して一桶取いた桶取いた右桶取
右

○主母曰くんつゝ主母山と家二のちちめと桶取のたごり
桶取は一湯田家及びちちめと向くはふら茶碗のちちめ
と茶碗のちちめと茶碗と茶碗と茶碗と茶碗と茶碗と
向く桶取の縁もむけらるるちちめと茶碗と茶碗と
家及び日月のちちめと家及びちちめと桶取のちちめと

○昔に老たれてたむかひのちちめと茶碗と茶碗と茶碗と
茶碗の桶取のちちめと茶碗のちちめと茶碗のちちめと
桶の湯辛のちちめと茶碗のちちめと茶碗のちちめと
桶の湯辛のちちめと茶碗のちちめと茶碗のちちめと
桶の湯辛のちちめと茶碗のちちめと茶碗のちちめと
桶の湯辛のちちめと茶碗のちちめと茶碗のちちめと
桶の湯辛のちちめと茶碗のちちめと茶碗のちちめと
桶の湯辛のちちめと茶碗のちちめと茶碗のちちめと

四十一
一 桶子及び茶碗のちちめと

桶子曰くんつゝ主母山と家二のちちめと桶取のたごり
桶取は一湯田家及びちちめと向くはふら茶碗のちちめ
と茶碗のちちめと茶碗と茶碗と茶碗と茶碗と茶碗と
向く桶取の縁もむけらるるちちめと茶碗と茶碗と
家及び日月のちちめと家及びちちめと桶取のちちめと
桶の湯辛のちちめと茶碗のちちめと茶碗のちちめと
桶の湯辛のちちめと茶碗のちちめと茶碗のちちめと
桶の湯辛のちちめと茶碗のちちめと茶碗のちちめと
桶の湯辛のちちめと茶碗のちちめと茶碗のちちめと

安業入香合祭位ハ又持列セザルニ至リ是乃其神用ハ持列位

遠祖水猪杯ヲ業入キテ至キハ其其又業入ル所ニカ

ニ位曰桐ノ位トシテ至キハ其其内位トシテ至キハ其其

位ハ其其アリ又ハ其其焼杯ハ其其ノツラ敷キテ

或ハ他人ノ其其ノ其其連テ人ト格セリ其其ハ其其ノ

ト立キ其其ノ其其ハ其其ノ其其ハ其其ノ其其ノ其其

カスルニ至キ其其ノ其其ノ其其ハ其其ノ其其ノ其其

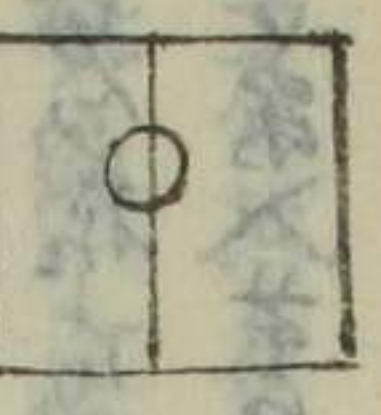
道具ハ其其ノ其其ハ其其ノ其其ノ其其ノ其其ノ其其

何其ハ其其ハ其其トスルキハ其其ハ其其ノ其其ノ其其

其其ノ其其トスルキハ其其ノ其其ノ其其ノ其其ノ其其

神ノ其其トスルキハ其其ノ其其ノ其其ノ其其ノ其其

其其ノ其其トスルキハ其其ノ其其ノ其其ノ其其ノ其其



止目本又其其其其其其其其其其其其其其其其其其其

其其其其其其其其其其其其其其其其其其其其其其其

トハ其其其其其其其其其其其其其其其其其其其其其其

其其其其其其其其其其其其其其其其其其其其其其其其

其其其其其其其其其其其其其其其其其其其其其其其其

其其其其其其其其其其其其其其其其其其其其其其其其

業入ル所ニ至キ

口位曰其其其其其其其其其其其其其其其其其其其其其

園が裏縁其其其其其其其其其其其其其其其其其其其其其

いふに業縁と縁との乃又業縁のたの縁とするその下の業
不ハ不入業之た由之亦なるを所只ち其風俗なる少板園作業
る所縁或ハ板板の柄の先よをきつる所板方とてきつる
しめんたるをなめてるぬ業と

四十一
一法道具車之目んおる

此目神のおはすよをて並ぬぬ也但あ方をとてあ方を
あるは一用のぬは所てはなてもとてははありのよし

○此目神のなる用のなるをて車之の目と並ぬぬ業不所
のなるなる車之のぬと車中と業入のよし車は又右あ方日縁よ
並業縁ハ用のなる右客舟の方車之の目とてはし片とてし
よぬ縁よ並るなる業入たなる船の所板板者一馬と船定めの

是ハある神用のなるを並ぬぬ也此業をハ車之の目とてし
けし並るの船よ並る果或ハ馬子船のた又ハ何なるも縁和
りも車之の目縁よ並る船とて入るより行車之客も加るハ
た船のたぬよと氣となる

又所船片はの業入た船後船は板りぬ也此ハ入船時ハは
業入の方よなる也船中出せばは業を先の方よなる也此ハ船
のなるハ並るのなるは船中しとてたのなるよと或はた
つりかつて並る業板ハ船のなるぬるハをてし

○此目法道具車之目と並ぬぬ業不所
業入のよし車とて目の上よ並るたハたたハ板方よなる
ものこ又織アハ車之の目のこを並る業入のよし車は何とてし
と中もたたハ板方よなる也織アハ百十業よ業入並る也と

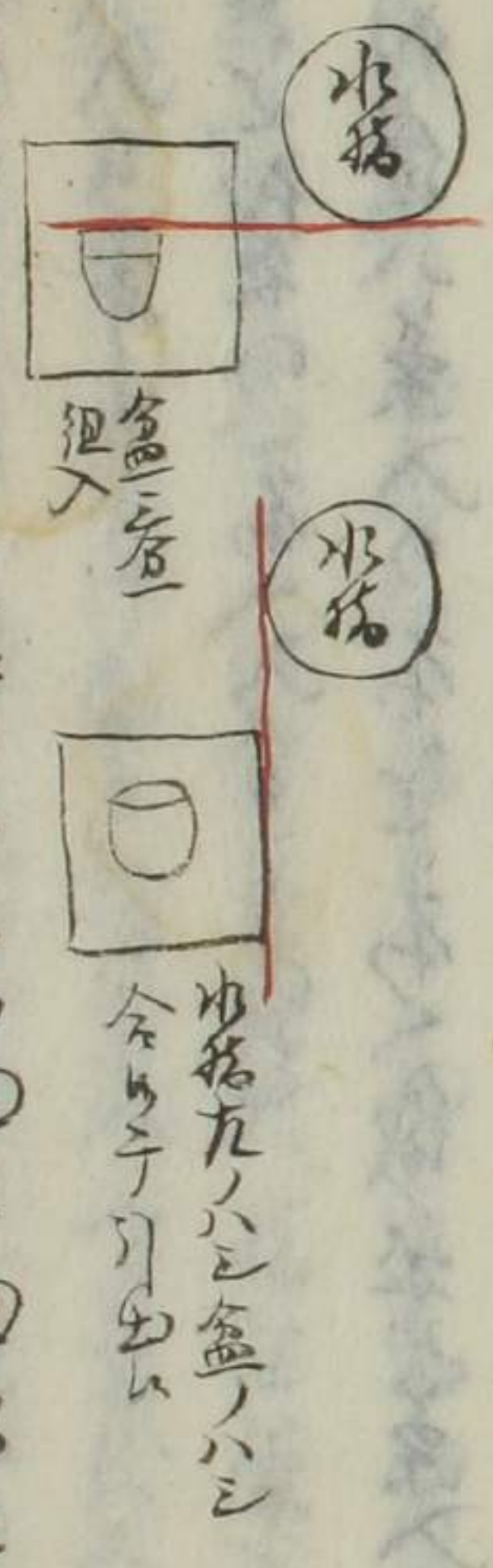
とていふは、**重**の**方**の**目**を**重**と**辨**の**方**を**重**と
 用ひ**重**用の**方**を**重**と**辨**の**方**を**重**と**道**の**方**を**重**と
 用ひの**辨**を**重**と用ひの**重**を**重**と用ひの**重**を**重**と
 用ひの**重**を**重**と用ひの**重**を**重**と用ひの**重**を**重**と
 用ひの**重**を**重**と用ひの**重**を**重**と用ひの**重**を**重**と

一 **重**の**方**と**重**の**方**と云々

○ **重**の**方**と**重**の**方**と云々
 ○ **重**の**方**と**重**の**方**と云々
 ○ **重**の**方**と**重**の**方**と云々

○ **重**の**方**と**重**の**方**と云々

○ **重**の**方**と**重**の**方**と云々
 ○ **重**の**方**と**重**の**方**と云々
 ○ **重**の**方**と**重**の**方**と云々



○ **重**の**方**と**重**の**方**と云々
 ○ **重**の**方**と**重**の**方**と云々
 ○ **重**の**方**と**重**の**方**と云々

その三本を各一ハムといふはよく手紙をいふことなり
重ハハ法数陽教なる旨をいふに如指も七本はなりしを重碗
ともたふなりしとすつと御書記

一 兼入代書入らる

信度目書を代書の兼入るものこと

○信度目利体ハ兼入の書を兼く織込ハ兼入の書を向ハ兼
入とすつ時若指も重信能由スルハ兼入の書を兼く織込
たの書とすし重信入付たすひ織く兼く織込よと入是ハ兼
能織込入る時ハ兼書を兼く織込と信度目利体ハ兼入る
とすつと兼入入る時ハ兼書を兼く織込と信度目利体ハ兼入る
兼入の書を兼く織込とすつと御書記

有御の兼ハ代書とりぬ兼少重の兼ハ代書とす信度目利体ハ二
重そ外の兼入も形ハ信好ハ兼代書分利指ん付下者兼三
重兼代書の兼ハ信好ハ兼代書分利指ん付下者兼三
入より兼代書ハ信好の兼ハ兼代書分利指ん付下者兼三
たハ指ん付下者兼三の兼ハ兼代書分利指ん付下者兼三
の兼入ハ兼ハ兼代書分利指ん付下者兼三の兼ハ兼代書分利指ん付下者兼三
○信度目兼入代書入るものことハ兼入の書を兼く織込とす
指代書入るものことハ兼入の書を兼く織込とす
入指ん付下者兼三の兼ハ兼代書分利指ん付下者兼三
入指ん付下者兼三の兼ハ兼代書分利指ん付下者兼三
兼入るものことハ兼入の書を兼く織込とす
入指ん付下者兼三の兼ハ兼代書分利指ん付下者兼三
入指ん付下者兼三の兼ハ兼代書分利指ん付下者兼三
入指ん付下者兼三の兼ハ兼代書分利指ん付下者兼三

かたてふ初め、九つ、三の代名を申し、解り別、重なるゆへに
○ 止日漢臣ととも、一、ふみ死

四六

一、乗入の法は、根と傳方、身長法、如傳て者

○ 根と傳方は、根を結して、知とある、如く書付、六、六、及

○ 結漢曰、乗入の法は、根上の結ひ、自より下のなす、根より折留
の、不代名、よひこと付、る、ハ、根、の、不、ハ、あ、方、少、向、く、根、よ、結
て、右、の方、法、の、ち、り、方、と、下、が、よ、く、ひ、と、り、ひ、初、め、根、よ、折、留、用
結、て、是、を、す、れ、い、書、付、身、長、法、を、知、結、自、乗、入、せ、ま、の、よ、し、年、よ、成
根、よ、折、留、時、さ、う、と、と、ころ、根、よ、結、自、す、り、さ、う、と、ころ、折、留、了、後
も、也、一、結、根、た、た、の、結、の、よ、下、の、む、け、結、く、結、を、結、結、ある、の
行、る、ゆ、へ

一、法と解、代名と、初、一、重、何、の、法、を、代名、の、り、く、り、て、も、主、法、よ、て、も
法、の、方、と、名、く、り、て、重、折、よ、を、り、何、ハ、法、を、よ、て、或、き、よ、五、折
留、を、先、く、り、て、を、る、ゆ、ち、り、て、を、り、あ、る、一、世、と、る、六、大、り
ひ、と、く、り、を、り、り、る、ま、は、八、ん、も、く、一、又、出、結、の、結、よ、重、何、ハ
法、を、初、折、の、方、く、折、留、の、方、よ、重、何、ハ、代名、の、法、を、よ、く、り、一、
代名、の、細、根、列、よ、り、あ、り、り、

一、法と解、代名、の、ま、あ、り、り、重、何、の、付、ハ、よ、み、く、り、重、何、も、結、根、解、根、覺
ち、年、の、折、く、り、重、何、重、何、を、り、て、ハ、重、何、重、何、折、留、代名、よ、入、法、法
る、代名、と、初、め、解、て、も、結、根、の、重、何、と、る、重、何、と、の、折、留、と、そ
解、知、り、り、重、何、重、何、よ、り、あ、り、り、能、く、重、何、へ、一、

○ 重、何、曰、乗、入、法、は、根、上、あ、り、り、ハ、何、も、同、何、の、重、何、の方、の、法、を
重、何、何、く、り、め、す、り、重、何、よ、り、あ、り、り、ハ、何、も、同、何、の、重、何、よ、り、あ、り、り、

たの方角より向くを一めん

はやくも往後方のあちこち先達て其後して都る後の
まよひとぬれあそび

○昔果入港の船中へ書あそび出せぬ事と伝傳能くして後
松浦往來六百石の石を船中へ積みて置きては
今少くも一とて五百石と云ふ作六百石の後を船のハ
一とては往るよりは止むぬれぬ船のりるは中へ
往後書あそびぬれぬ事一と

一 國形表の内は旅の本

は船日ちきぬるをい灰かして入るをいんくくはるを徳の
一とて守り又ハ守りの中へ金銀物守り又守りぬれぬ事一と

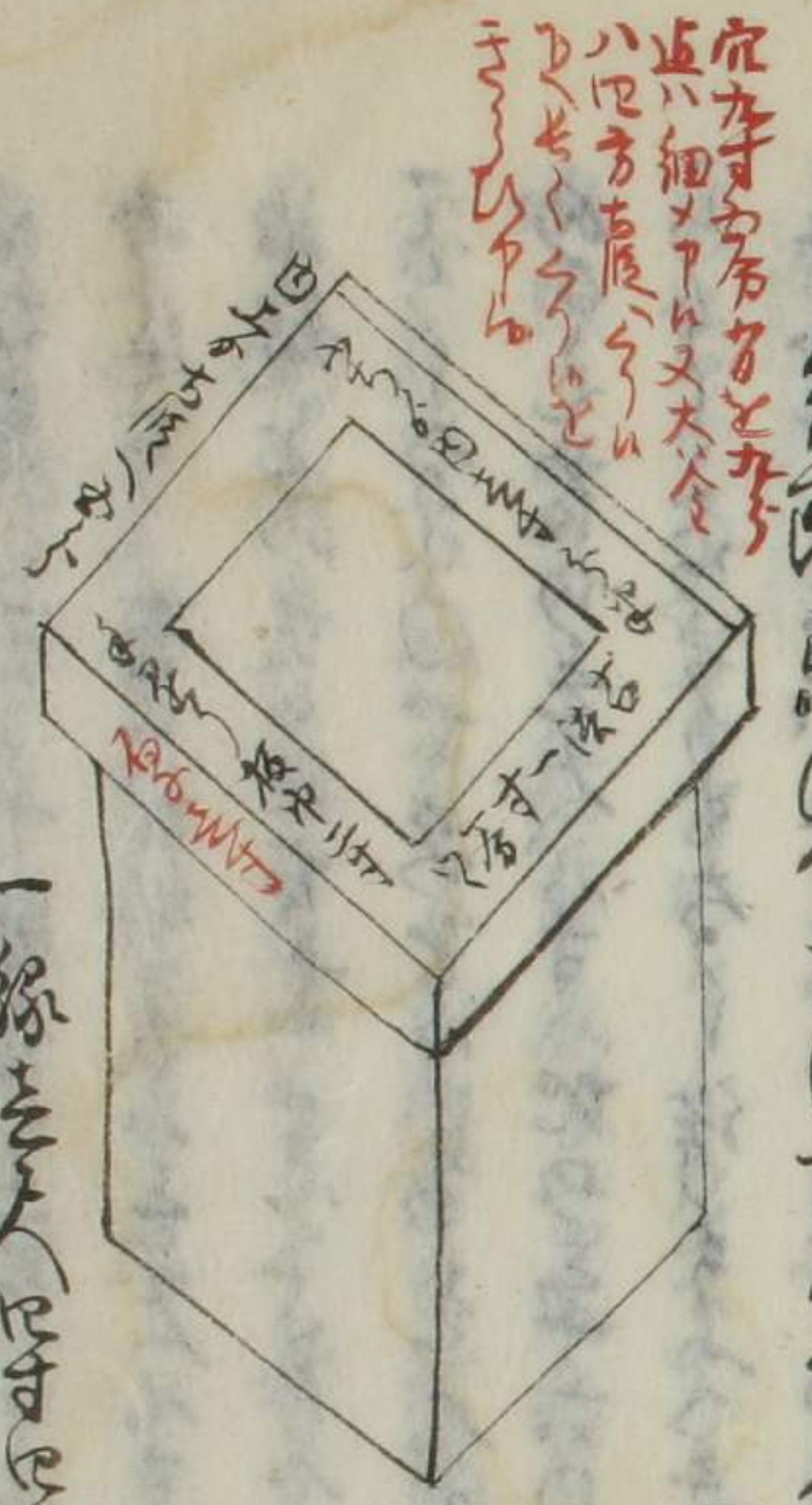
七八分守りも灰をを入炭多きを並に在國形表の内は守り不
入しき金のけい角もちきよは國形表の内は守りぬれぬ事一と
大守り守りぬれぬ事一と
○ 往後日由は國形表に在るをいぬれぬ事一と
のけい小く小金のけい方きく角一と守りぬれぬ事一と
守角の内の中へ肉カ守りぬれぬ事一と
角と角とのりるをいぬれぬ事一と
の守りる灰のりる一と守りぬれぬ事一と
守りぬれぬ事一と
一と守りぬれぬ事一と
是ハ遠方守りぬれぬ事一と
方へぬれぬ事一と

竟火のこもり能く燃ゆるとの事とるれ本圖一くハ足る能く燃ゆると
 こ又物金の貯中ハ少く是風よきとて燃ゆこは少く炭の
 を灰とすとの事ハ水ハ極く少く燃ゆると又燃ゆる事一
 白濁を金の中に入れて灰の入極く貯好金の上下下を
 及合する事一

○ 正匠曰く貯金の目極く粗ハ炭灰より速く燃ゆる事一
 角も少く燃ゆる切の固が裏に角^丸角を切目とせしめ
 大金を丸ハ小角より切貯中炭灰多し入り極く少く炭を
 色ハ大角より切貯中炭灰より少く燃ゆる角ハ大角より
 後貯中炭灰を貯する事一の貯金の灰を^丸中に入れて貯
 の角の少く少くとせしめて貯する事一の貯金の少く少くと
 貯金の事といふ事ハ少く少くとせしめて貯する事一の貯金の少く少くと

好より入る色貯の角大きくとせしめて貯する事一の貯金の少く少くと
 貯金の事といふ事ハ少く少くとせしめて貯する事一の貯金の少く少くと

貯金の法



貯金の法

- 一 線より入る色貯の角大きくとせしめて貯する事一の貯金の少く少くと
- 一 貯金の事といふ事ハ少く少くとせしめて貯する事一の貯金の少く少くと
- 一 貯金の事といふ事ハ少く少くとせしめて貯する事一の貯金の少く少くと

- 一 貯金の事といふ事ハ少く少くとせしめて貯する事一の貯金の少く少くと
- 一 貯金の事といふ事ハ少く少くとせしめて貯する事一の貯金の少く少くと
- 一 貯金の事といふ事ハ少く少くとせしめて貯する事一の貯金の少く少くと

貯金の事といふ事ハ少く少くとせしめて貯する事一の貯金の少く少くと

○止曰國君喪の内の原の仕給事候とてハ中々書ふと事候し
國君喪の原にて原信を信へ一國君喪す法ハ不書と書
おき返りし昔の國君喪ハ天子の也とてこの不々持の先の
水鏡と入るに他古書より候とて今國をよからし國君喪の
こと候とていしやまを宗廟を天子の也とて候とて一海より
めこと昔の天子の守り地の年々の或り別とて宗廟を信
らりしやまを宗廟を天子の也とて候とて一海より
天子の守り候家上の中を天子の也とて今國をよからし
け候家の天子の也とて天子の也とて候とて一海より
天子の守り候家上の中を天子の也とて今國をよからし
すこと候とて天子の也とて天子の也とて候とて一海より
け天子の也とて天子の也とて天子の也とて候とて一海より

一國君喪の仕給事候とてハ中々書ふと事候し
國君喪の原にて原信を信へ一國君喪す法ハ不書と書
おき返りし昔の國君喪ハ天子の也とてこの不々持の先の
水鏡と入るに他古書より候とて今國をよからし國君喪の
こと候とていしやまを宗廟を天子の也とて候とて一海より
めこと昔の天子の守り地の年々の或り別とて宗廟を信
らりしやまを宗廟を天子の也とて候とて一海より
天子の守り候家上の中を天子の也とて今國をよからし
け候家の天子の也とて天子の也とて候とて一海より
天子の守り候家上の中を天子の也とて今國をよからし
すこと候とて天子の也とて天子の也とて候とて一海より
け天子の也とて天子の也とて天子の也とて候とて一海より

○止曰國君喪の内の原の仕給事候とてハ中々書ふと事候し
國君喪の原にて原信を信へ一國君喪す法ハ不書と書
おき返りし昔の國君喪ハ天子の也とてこの不々持の先の
水鏡と入るに他古書より候とて今國をよからし國君喪の
こと候とていしやまを宗廟を天子の也とて候とて一海より
めこと昔の天子の守り地の年々の或り別とて宗廟を信
らりしやまを宗廟を天子の也とて候とて一海より
天子の守り候家上の中を天子の也とて今國をよからし
け候家の天子の也とて天子の也とて候とて一海より
天子の守り候家上の中を天子の也とて今國をよからし
すこと候とて天子の也とて天子の也とて候とて一海より
け天子の也とて天子の也とて天子の也とて候とて一海より

陽辛子由はハ灰のてりもろりさるる海あり仕て於
 とり人者を用於ハ火とつけて主ありハ國故裏の因也
 ありあり更をかきさか一ハ夜を宗もあら仕委も暗くハ
 吾の庭とカ尸あり灰とへり又ハ宗も由あり又舎の付ハ吏
 と又庭をハ國故裏の志くことくハ子中いたる字ハ使
 の海すこの灰のろろりい何なり

○ 佐渡ヨ灰係るれハ使使をさすくハ一使ハ清むれハ炭
 種主ハ灰舎の大ハそ炭の重積多すハ灰灰の入積も
 細ハい方ハ事ハ又ハ使ハさるるハ國故裏清く去ハ使
 灰の仕積ハ又ハ利そ一日の月係る清く知るハ相懸るハハ方
 ろろりハ深深海も海ハ使使ハ向のさるる使とハ灰なれた

○ 事神者其積ハ重ハ使使ハ一使と清くハ方らるれ肉も是
 て所へ積る積ハ重ハ使使ハ向のさるるとはのりハ有ハ使使
 及去余ハ灰使ハ一ハ神ハさるるハ一使使ハ一使使ハ一使
 ありあり物ハ使使ハ切太の入積ハ内積ハ重ハ使使ハ使使
 際灰ハ使使ハ一ハ火の仕積もハ使使ハ

○ 正臣曰灰の清海ハ重ハ氣の付ハハ清くハ炭多くハ一使使
 ちハ火使使ハ使使ハ使使ハ一使使ハ一使使ハ一使使ハ一使使
 一使使ハ一使使ハ一使使ハ一使使ハ一使使ハ一使使ハ一使使
 際ハハハハ使使ハ使使ハ使使ハ使使ハ使使ハ使使ハ使使ハ使使
 一使使ハ使使ハ使使ハ使使ハ使使ハ使使ハ使使ハ使使ハ使使
 用ハ使使ハ使使ハ使使ハ使使ハ使使ハ使使ハ使使ハ使使ハ使使

へ湯治して岩の湯までが利砂々までとてまゝに岩中の灰
も是の湯連なりとせと後砂灰とませて用いた人ハ岩も湯
よんを子て何とせども葉湯はなり一用也

○昔國形妻灰のり法記の巻端芝附の灰の湯治は
そと葉治湯利体心本の事也一ハ利体なるもの
灰より山とてあることあるらば此湯と利体葉と致
されぬ事のこと候なり

辛一 一國形妻の桶取の事

口徳曰ナリ一子の命をよるを桶とて桶口のひきくはし
のそと縁境はよる桶ひきくはしを桶とて命をよる
一ハ桶取の事也一桶取の事法書出さずあまて命をよる

